



©emiko kinoshita

新しい銭湯像を目指す



狛
江
湯

オーナー
西川隆一さん

撮影協力: 狛江湯

書: 木下恵美子

一〇月一〇日は銭湯の日。これからの季節、寒い日がやってくると恋しくなるのは、やはり身体の芯から温まる銭湯です。今回のインタビュアーのお相手は狛江で話題の銭湯、狛江湯（市内東和泉）のオーナー西川隆一さん。これからの新しい銭湯像とは何か？そんな熱い思いをお聞きしてまいります。

（聞き手 三宅まこと）

開放的な銭湯は、外から人が来て、情報発信するまちのメディアになる。

銭湯を経営されるようになった経緯は？

元々は七〇年前に先々代が狛江で銭湯を始めました。最盛期には狛江の街でも一〇軒の銭湯があったそうです。その後、先代がやっていく時に代替わりの話になりました。私も十五年くらい働いていまして、お店を継ぐか継がないか迷っていたんですが、その時期がちょうどコロナ禍でした。

そんな行動制限があるような時期であっても、若い人たちがサウナ目当てで大勢来てくれました。それを見て、これはイケるなと思いました。

「スキーマ建築計画」が設計されたんですね

まずは銭湯をリニューアルしようと思い、銭湯を手がけている建築家の作品を



（※）スキーマ建築計画は“半建築”という概念で、素材を活かすためあえて塗らない壁や柱、むき出しの配線など個性ある作品で知られる建築設計事務所です。ブルーボトルコーヒー（清澄白河）など数多くの店舗設計を手がけています。

あちらこちら見に行きました。その中でデザイン的にピンときたのがスキーマ建築計画（※）の手掛けた銭湯でした。事務所へご相談に伺ったとき、美大卒の私はアトリエ的な雰囲気と親近感を持ちました。（代表の）長坂常さん自身もお風呂とかサウナが大好きだったんですね。

その後、「まちにとつての建築は？」というアプローチを教えていただき、狛江という

地域がどういう場所なのか、狛江湯はいかに街になじんでいくべきかという話し合いは刺激的で勉強になりました。

西川さんが大切にされたことは何ですか？

私が一番大切にしたのは開かれたデザインにしたいという強い思いでした。

前のお店の入り口は目立たない場所にありましたが、道路に面した正面に銭湯ののれんをかけた、（以前のお店の）閉鎖的なイメージを払拭して壁をぶち抜き、外から見えるようにして風通しのいい場所にしたいという思いがありました。

「閉鎖的なことをなくす」とをなくす、そうすれば、

外から人が来てくれますし、開放的なこと



は精神的にも気持ちいい。あと、情報を発信していい、という思いもありました。

情報を発信する銭湯とはどんなイメージ？

狛江は半径2キロ、もつと近隣の街と交流すべきです。行政という境界線を見捨て、自分をコンパスの点としたとき、半径5キロくらいは自由に情報を手に入れられる行動範囲だと思っています。イベントで近隣の街のお店に出店いただくんですが、それはお互いのメリットになります。

銭湯にはそうした情報発信をしていくまちのメディアの役割があります。これからもう新しい新しい銭湯像を目指していきたいと思っています。



WEBサイト



インスタグラム



<サウナ>
サウナ目当てで、遠方から狛江湯に来られる方も多いそうです。キンキンに冷えた水風呂とテレコに入ると“ととのう”こと必至。

住所：東京都狛江市東和泉1-12-6 長谷川ビル
電話：03-3489-3881

狛江湯